同人作品

霜柱　　秋山義仁

鷹島の冬の棚田の霜柱大地持ち上げサクと鳴く
冬寒い寒いよ冬は電車来た来たから乗ろう行方知らない
木枯らし一号吹く頃は未だ死にたくはない虫の羽根が葉陰に
頬の冬寒さが増してコタツ中には犬が平和は温い
吾子の問い白い息となり空に消える町の底まで夜が満ちていた
太宰府の野面を燃やす彼岸花都は見えず心は真紅
家路を照らす月弱くしじみ採り手を赤くして有明海おだやか
鷹島超えれば荒き玄界灘アゴは群舞しまぐろはジャンプ
血合いだようまくはないし血の匂い安いから犬猫の餌

この血合い持って帰ってポチの餌でも血の味知らさぬ為に茹でてやる

ストリートピアノ　　荒井慎一

ベートーベンの荘厳ミサ曲歌わんと五十歳にてドイツ語学ぶ
優しき歌を歌うミスターチルドレンそれなら我は深き歌詠む
挽ぎりにて過ごせし午後の数時間われ楽団のサポーターなれば
小野リサの美しき歌声聴き入りて音楽堂より終バスに乗る
二〇一九年パパ様来崎オルガンとクワイアの歌ごえ天へ届きぬ
上智大オーケストラ部のコンサート友と聴きし日ありあり浮かぶ
N響のファビオ・ルイージの指揮見事夕暮れのあとの星を見上げる
上智大のイグナチオ教会聖歌隊の聖歌聞きたし我ソフィアン
村治佳織のギター演奏聴いてより押入れに眠るギター取り出す

ドトールの店員さんと小野リサのボサノバの話題尽きぬ晩夏よ
洗足の管弦楽奏すばらしくブラボーの声鳴りやまずいる

冬の星座　　石邉綾子

闘争も恋さえも捨てうつせ貝友は多くを語ることなく
くちびるの色あせてゆくつかの間の恋もいのちもいっそたき火に
焼べながらおりおりの夢が燃え尽きてゆくをみている薪のほむら
じれったいエイトビートにゆれながらこのまま枯れてしまいたいのに
県境の川を渡れば懐かしき冬の星座に見守られつつ
散りやまぬこがね色踏むこの時はただ鳴き果てた冬のぬけがら
制約の美を求めつつ装いし白留袖の姿を飾る
追悼に奏でし母の好きな曲いまでも傍で聴いているよう

物価高　　井上省吾

物価高家庭菜園サツマイモ炊込ごはん満腹にする
物価高家計簿つけて考えて買い物をする楽しみもある
物価高年金暮し楽でない無駄をなくして生活をする
物価高米も高いが電気代光熱費ほかあらゆるものが
物価高年金もらう有難さ多くはないが不足おもわず
物価高無駄を省いて生活し支払終えて残りで暮す
物価高健康面を大切にお金無くてもなんとかなるさ
物価高今あるもので生活し高望みせず質素に暮す
物価高配給制思い出し今の幸せ有難く受け
寒さ増し湯舟に入りあたたまり心身共にリラックスする
浴槽にお湯を沸かして身を沈めあたたかくして心休める

残り湯を洗濯槽に給湯する節約したと実感をする
浴槽に半分以下の湯を溜て体沈めて節約をする
毎日は入浴せず気がつけば一週間は入らぬ時も

家庭菜園

寒くなり草の生長にぶくなりやっと一息からだ休まる
収穫終えた畑を耕して石灰入れて土作りする
いろいろと本を見ながら体験を失敗重ね挑戦する
アスパラを二回植えたが失敗し今度こそわと願いをこめて
土作りコンポスターに生ごみを発酵させるＥＭボカシ
レモン苗寒さに弱くネットかけ霜除けをして翌年を待つ
サツマイモ収穫終えて片付けて腐葉土入れて畝作りする
用意する霜降る前に囲いして寒さに弱い木を護ること

里いもをオデンの汁に入れて煮てお昼のごはんこれだけでよし
ゆで玉子シイタケも入れサツマアゲオデンの汁を残すことなく
テレビにて子供に残す歌を聞くなつかしく聞く幼なき頃を
ゼンマイの時計のネジを巻きながら幸せ思い思わずなみだ
なつかしの童謡聞いて日向ぼこ過ごした月日遠い思い出
あれこれと思い出しては懐かしく陽当る部屋で空を眺める
日の当るところ捜して移動する自然の力まさるものなし

短歌の闇鍋　　川崎常喜

おもいではときにいのちをくるしめるひかるまぶしいあれでいいんだ
マルクスがいま生きてたら言うかもねスマホゲームはアヘンであると
やきばからのぼるけむりは母ちゃんが生きていたとのあかしでもある

ばかだから恋の定義がわからずにいつが初かもわからずにいる
死む　死むと　あえぐきみにもあさがきてハムエッグ丼むさぼるふたり
くるまいす母ちゃんをのせ散歩して…いまではそれも追憶のなか
あらたなるフェーズへきみは去りました肉体のなき言葉はいずこ
さいきょうの殺傷武器はなんだろうおそらくそれは陰口だろう
「行かないで」みせもの小屋のばけものが手をのばしても檻にはばまれ
まじわれぬ泡のむこうにきみはいてだれかをのせてはるかの空へ
いきをとめトイレにすわり眠りおり、そうかじいさんうまくやったな。
オムツ替え、嫗に腕をかまれおり。地球という名のさるのわくせい。
啄木も太宰も中也もみんなしてクズなやつです。ええ、ミートゥー。

Prema　　甲村雅俊

Premaとふアルバムまさにわが昔熱中したるポップ音楽
歌詞カード見ながら音に身を委ね子供のやうに歌詞を覚える
仏教は肯定すべき愛のこと不染汚なるは信なりと説く
印度にはPremaと名付けられし子の許多ゐるらし逢ひに行きたし
かにかくにおもひ煩ふ日々なれど愛を歌へばこころ明るむ

空性

空性のをしへのごとき新商品無煙無香の線香燃える
お磨きを忘れてをればくすみたる仏具に荘厳さるる本尊
介護する母と過ごせる歳月の終はりもうすぐ怒り禁物
銀幕のスタアのやうに日米の首脳は語る頬を寄せながら
馬車馬の首相に任せ国民は老いたる馭者のごとく揺らるる

姫御前(ごぜ)気分　　中川宏子

高速を走るかたはら左手に穏やかなるか駿河湾のあを
東名のサービスエリアわさわさと静岡産山葵漬「並」を購(か)ふ
いつもよりやせ細りたる大井川よはき吾でも渡りゆけさう
はろばろと浜松城のその後ろ聳え建ちたる高層マンション
浜松の楽器博物館にオルガンを初見にて中国人学生弾く
中国の楽器の金の彩色の鮮やかなりて銅鑼の音する
眼のわろき苅谷さんへと金色のレリーフ楽器栞をあがなふ
ホテルにてシングル二つを予約せしわれら夫婦のいびき対策
一階のホテル売店無人にて独りで入る勇気がなくて
ＦＭの音楽しづかに響くなり隠居のわれに貴重な独り

夕飯の席を予約する夫の脇　懐具合を気にする女房（わたし）

食む夫（つま）の口数少なくなつてゆき夕飯のひつまぶしのふはふは

ノンアルのビールがいいんだ　やうやくに短歌を作るスィッチ入る

「またあとで」夫と別れしそののちの浜松城のライトアップまみどり

明日行く美術館を決めるときレストランから割引券来る

憂鬱にて腰を上げたる旅なれどなにやら夜は姫御前（ごぜ）気分

ごしごしと　氷室敬子

パパパパのパパが好き何と言っても崩れない石頭がいい

ごしごしと体を拭いて気持ちよき母は最高の笑顔を見せる

帰るゆえ一度だけ会ってほしいと便りあり森の中へ入りゆく

しっかりと立てよ立て立て息子は怒りているわれは何もできない

神無月　　本田洋子

初蜜柑剥けば甘酸っぱい香りして夏の暑さは甘さと実りて

彼岸花やっと出会へし嬉しさよ赤き一群れ吾が心燃ゆ

神無月おくれおくれて金木犀下枝折りて小瓶に挿しぬ

銀色に空はしぐれて神無月けふは冬の入り口さへ見ゆる

近隣の中学校より合唱の練習の声聞こへ来る日々

転ばずぬ走り切ったと楽しげな小二の孫の運動会だより

我が国に女性総理の誕生もこの神無月の満つる日のこと

一直線次の部屋まで射す朝日あまりの強さカーテンを引く

薄の穂

丈高く風に吹かれて薄の穂これさへあれば秋の絵となり

北天にスーパームーン美しく赤く輝く今日は立冬
あをによし奈良の山嶺色づきて昔を今にもみじ伝へむ
お風呂場の窓を開けるとヤスデの実柔らかな白心惹かれて
深まりて街路樹の葉色づきてカサコソ集まり宝石の様
茹で玉子氷に浸しコンコンと白い素肌が生まれ出てくる
膝腰の痛みも吾れは深まりて風の冷たさ身に滲みてくる
銀色のススキヶ原に分け入ってずんずん進む夢を見しかも
信仰の確信持てず何故(なぜ)人に自己の信心推められようか
信仰の友はいつでも霊界が上がる下がるのと言っている人
三人で人様のドアノックして秋の日中に未信者浄霊
神社では新嘗祭とて大事な日稔りの全て神に感謝す

〈山の熊さんへ〉

子を連れて人間界に下りて来ず子に冬眠を教へなされ
人里に旨き物有りと思うやもあれらは皆熊さんの物ならず
人間にいざ挑んでも勝てないよ人間はいざ銃を持ちてる
此の年にどんな異変が山にありや人里恋しとなりたる理由(わけ)は

冬がやってくる　丸山　光

青空にあらん限りの大声でキミの名を呼ぶぼくたちみなで
ひとつずつお返しをして老いていく唯一の希望をしっかり抱いて
カモメ語を理解できずに手話のごと両手ひろげて愛を伝える
意味もなく大谷・藤井・丸山と名前ならべて悦にいる夜
師匠らの笑わせている口上に微動だにせぬ新真打は
花占いいるかいないか神様はいますいますと花びら毟る

武器もてば使いたくなる愚かさを忘れてしまったホモサピエンスは
爺ちゃんは頭が白くなって死ぬ義理の息子があわてて叱る
猛暑過ぎ秋もなかばの集積場ペットボトルの大幅に減る
教会の裏庭に咲く曼珠沙華一本だにも赤はなく白
除草剤一切つかわず神さまにおまかせしている庭のコスモス
曼珠沙華うらみつらさのある如く一花傾きひむがしに咲く
赤きなか罪赦されしごとくして一花真白き曼珠沙華さく
隣席で妻と娘がゲームして私ひとりが外を見ている
計算は合わないけれど吾子ふたり結婚式に三度出席
思い出の品を処分す哀しみのそのプロセスも思い出となる
葉月尽き夏の終わりを惜しむよう太き胡瓜がつらなり垂れる
バス停を過ぎ去って行く楽しさを覚えてしまった回送のバス

なかなかの作家のごとき文章が送られてくる迷惑メール

立ち上がりふらつくからだをいとしんで二足歩行を確かめ歩く